

「認知症」を知る②

計3回連続で【認知症】をテーマにお届けしている特別企画。

今回は認知症の種類とセルフチェックについてだったが、2回目は認知症の検査についての話を前回に続き、認知症医療の最前線で活躍されている医療法人白卯会白井病院の田中医師に話を伺った。

——認知症の検査について教えて下さい。

認知症の検査は面談、身体検査、認知症検査の大きく三つに分類されます。

(1面談) ご本人・ご家族から、現在の身体状態と過去の病歴を確認します。当日のヒヤリングできちんと伝えられない場合もあるので、あらかじめメモなどを用意しておくこともおすすめです。

(2身体検査) 血液検査や尿検査、レントゲンなどの一般的な身体検査を行い、ほかの病気の可能性の有無も確認します。

(3認知症検査) 問診による神経心理学検査と脳画像検査があります。神経心理学検査は、代表的なものでは「長谷川式簡易知能評価ス



精神科 部長

田中敬剛 医師

ケール、「ミニメンタルスケート検査」、「時計描画テスト」などがあり、日付や記憶についての質問や単純計算や作業を行います。ほとんどの検査では机をはさんで向き合い、検査の手順に従って、質問に答えたり、何かを書いたり、道具を操作したり、といったことを行います。

脳画像検査は、CTやMRIなどで脳の萎縮や脳梗塞・脳出血など脳内の病変の有無を調べる「形態画像検査」とSPNECTやPETなど脳の血流や代謝を測定し、脳内の活動について調べ、認知症の診断に役立ちます。列記しますと、大きな感じになってしましますが、これらの検査は、認知機能が保た

れている部分とうまく働かなくなっている部分を知るものです。また知ること、これらの生活に必要な支援や工夫を考えるポイントにもなります。

——受診・相談するにあたって、事前に整理しておくことはありますか？

医師が診断をする際、普段の生活のなかでご家族がどのような状態であるか。などの情報も求められます。

現在どのような行動をしているのか、日常生活の中でどのように困っているのか、いつから症状が出るようになったか、ほかに病気はないかなどを尋ねられます。

本人が答えられない状態であることも多いと思いますので、受診するときには家族が付き添い、これらの質問に答えられるようにしておくことが良いでしょう。その場で慌ててしまったり、話し忘れたりすることがないように、事前にメモなどにまとめておくことが便利です。(次回は9月号)

【受診する前に整理しておきたい項目】

- ・もの忘れは、日常生活に支障をきたすほどか
- ・最初の異変は、いつの間にかに出てきたのか、突然出てきたのか
- ・症状が出始めたころに気になるようなきっかけ、病気や事故など
- ・この半年の間に症状は進行したか
- ・本人のこれまでの病気や服用中のお薬について
- ・その他、家族として心配なこと、気がかりなことはあるか

